

「濃いピンクっていいですよね、こう…刺激的で」

錠前咲苗が岩戸直志にそう言ったのは雰囲気のあるバーでも、薄暗い部屋が売りのラブホでも、東京タワーがよく見えるその麓の公園でもなかった。場所は神田古書店街の、外に置かれた本棚の前だった。隣でしゃがみこんで本を物色していた岩戸は、セリフと場所があまりにも一致していないように感じた。その感覚はおそらく一般的だった。

岩戸は何か言おうと口を開いたが、何も言えなかった。口をすこし開いたまままばたきをすただけだった。錠前は彼の様子にふと気づいた。

「え、そう思いませんか」

「いや…：どうだろうな。想像してる色の感じにもよるだろうけど、俺はあまり」

「そうですか…：じゃあどのような色が刺激的だともいいます？」

なんだその問いは、と質問を返したくなったが、岩戸は簡単に律した。不思議な質問をされることは決してめずらしいことではなかった。

「『刺激的な色』ねえ…：金色とかかな。それか白光色とか」

「輝いているものが刺激的ってことなの？」

「そうだね」

へえ〜、と関心ありげに錠前が頷く。今度は黙って考え込んだ。ふりではなく、まじめに考えた。岩戸は立ち上がると、言葉少なに似たような質問した。

「錠前は、なんで？」

彼女は彼の顔を見上げてから、うーん…：、とうなった。眉根を寄せたまま、固まった。岩戸は友人がそうなるかと答えを聞くまでが長い場合があることを経験から知っていた。質問をした彼が彼女の近くから離れた場所の本やCDを物色し始めたのはそのためだった。

「性的なイメージと繋がるから、かな」

やがて物色し終えた岩戸が店内で会計を済ませて出てくるのを出入り口横で待っていた錠前が、前置き無くすっぱりと答えた。彼が、ふ、とわらった。

「なんのひねりもないじゃんか」

「なくちゃだめですか。ひねり」

「いいや、そうは言わないけど」

会話を短く終わらせてから、ふたりは肩を並べて歩き出す。隣の店には入らなかった。その次の店に入ろうとした岩戸は、しかし袖を引かれた。当然そんなことをするのは錠前だった。

岩戸には今入ろうとしている本屋を錠前が好んでいた覚えがあった。だから不思議に思った。加えて彼はその店に欲しい本が入荷している情報を得ていた。しかし穏やかに訊ねた。

「入らないの？一回別行動する？」

「今日、濃いピンク的な気分なんですけど…：」

岩戸がその言葉の意味を勘違いなく察せたのは、間違いなく先までの会話のおかげだった。